



TITLE:

章學誠：其人と其學

AUTHOR(S):

岡崎, 文夫

CITATION:

岡崎, 文夫. 章學誠：其人と其學. 東洋史研究 1943, 8(1): 1-19

ISSUE DATE:

1943-03-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/145784>

RIGHT:

東洋史研究

第八卷
第一號

昭和十八年二月發行

章學誠——其人と其學

岡崎文夫

一 其人

恩師湖南先生から章學誠の著述の必ず一讀すべきことを諒されたのは、恰も私が大學を畢業した頃であつた。其時以來私は斷えず章の著述に親しんで居る。後湖南先生は章の年譜を著はされ、且其序文に於て、彼の學問の占むべき地位を闡明せられてから章學の重んずべき一面の存することが確認せらるゝに至つたのであるが、先生の年譜の公にせらるゝや、恰も其響に應ずるが如く、胡適氏は亦章氏の年譜を公にした。かくて彼我兩邦の讀書者の間に、章學の價值が廣く認めらるゝに至つたと考へて宜しからう。尤も湖南先生の年譜が「研幾小錄」の中に收められて公刊せられた時には、蘇峰先生は多少の異議を挾まれたと記憶し、且胡適氏が章學に對して示した理解の仕方には、彼邦の國粹的學者の中に少なからず異論が出て居る。胡氏年譜は其後姚名達によつて詳しく布演せられ、それによつて學誠の人と學との一般を容易に諒知し得る。たゞ其書に冠した胡氏の序文によれば、章學を理解するに餘りにも西洋學の方法に據り過ぎ、それは恰も彼は清朝の考證學を以て科學的方法と同一視した

と似た態度であつて、そこに國粹學者の不滿が存する。何れにしても、章學の價値の批判又は章學の理解の仕方等に於て、必しも一定の論がないと斷するのは至當であらう。たゞ章學の重視すべき價値あること又は最早議論の餘地はあるまい。

翻つて考ふるに、章の學は從來彼地の學者に於て餘り高く評價されなかつたことは事實である。「先正事略」にも「正續碑傳集」にも勿論その傳がない。今の「清史稿」の前身たる「清史列傳」には、其名は文苑傳中に列せられて居るが、其記事の中に、章自ら王充を卑く視、又劉知幾を軽く考へて居るが、此は彼の誇大癖であつて、宋の鄭樵と伯仲の間に置かるべきだと批評を加へて居る。さうすると、此列傳の作者は、宋の鄭樵をも文苑傳中に置かんと欲する者であらうが、これこそ却つて史家の見識を見えざる凡庸の學者たるを顯す者と云ふべきであらう。「清史稿」も亦同じく文苑傳中に章を列し、而もその記事寥々、たゞ強ひて其名を列するに過ぎぬ。若し「清史稿」が正史であるなら、章の學問的地位は形式的に一應定つたと云ふべきであらう。然し眞の學問上から之を見れば、却つて清史の全編が改變せらるゝに値するかも知れぬ。總じて清朝一代の學問は考據學を主流となすと稱せらる。考據學の特質は之を次の如く要約し得るであらう。即ち（一）博引旁徵して事の眞相を知る。（二）一書を參互考訂して其著書の眞意を知る。この二つが重要な方法である。然し考據學の意圖する所は、經學の眞意を理解するにあり、決して徒らに考古的立場に於て古代を知らうと云ふのではない。たとへば、此派の開祖と目せらるゝ戴震は言語學的方法によりて古書を読み、遂に原善編を作りて「自然而必然」と云ふ考へ方に到達した。吉川學士の注意せられた所を借用すると、段玉裁は「說文」の古は故也と云ふに注し、物の原理即「物の然る所以」と解したと云ふ。段は云ふ迄もなく戴の高弟であり、戴の開いた考據學を詳密に押し廣めて、此學の不動

の基礎を作り上げた事は、周知の如くである。而して段の著はせる「戴震年譜」に於ては、戴の開いた考據學によつて始めて古今治亂の源を知り得たと云ふ。然らば考據學者の意圖する所、決して單なる智識として古を學ぶに非ず、「物の然る所以」を理解するにあつたと考へて宜しいであらう。戴震は宋儒の説に反對し、理と云ふ字を解して情の喪失せざる者だと云ふ。蓋し理と欲とを嚴格に對立させる宋儒の哲學的世界は、考據學者により一轉して情感による文化の世界を求め、そこに經學の眞意を汲み取らうと欲した者だと言ひ得るであらう。而して章學誠の學は、此考據派とは全く對立の立場を取る。既に考據學は清朝の正統の學であるならば、章學は其流外にあり、隨つて其點から言へば、アカデミツクに對する處士派と云ふことにもならう。章學が當時に於て重んぜられなかつたのは、恐らく此の爲めであるまい歟。而して考據學の流弊は枝葉を碎くに墮して遂にその大體を顧みざるにあり。之を救ふに章學を以てすべきこと、既に往々注意せられつゝある所である。此意味に於ても章學に一顧を與ふべき價值充分に存し、又我國現下の學界に於て、考據家末流の弊害に陷る者絶無に非ざる際、章學を顧みるも亦必ずしも意義なしとせないであらうか。

章の爲人を胡・姚の年譜によつて考へて見よう。年譜は楊鐘羲の「雪橋詩話」中より、曾燠、及謝蘊山の詩を引いて、それを以て章の容貌風采を考ふべき史料として居る。それによると、章の風采揚がらざること甚しく、五官の中、耳は聾に、鼻は作り直し難い程不格巧であり、加ふるに頭痛持で、面には皮膚病の跡（癩）があつたと云ふ。章が曾燠に別れるときに贈つた詩中「誰知管城骨相屯」とあれば、或は彼自身その容貌の揚らざることを自覺して居たであらう歟。其人に對應する際の如きも、恐らく輕率にして禮に叶はなかつたであらう。彼の猶壯年の頃、時の學者文人を優遇すると云ふ點で評判を取つて居た文章家の朱筠の家に寄寓し、時の名流と自由に

學問文章を論じ合つた折のことは、彼に取つて愉快な記憶を残し、其狀景を述べた所に據ると、年の暮、風雪の中に、高齋に於て名流と歡衆し、相共に形骸を脱落してまた人生あるを知らざるが如しと云ふ。然し朱筠の弟子李威によれば、章は此際議論湧泉の如く、姍笑して弟子の禮がなかつたと云ふ。恐らく長上の前を顧みず、急がしい調子で自説をまくし立てた者であらう。

其性質に就ては、彼自身の記する所に據るに、幼時より病弱であつたと共に、性質も亦愚鈍であつて、十六の時、父の任官地たる湖北應城の官舎に赴いたが、小供心のとれぬ爲めに、父の賓客は皆父の後繼者のないことを憂へたと云ふ。所謂小供心のとれぬとは、四書の文を暗誦する事の出来なかつた事を指し、己が我儘に讀書する事は天性好んだらしく、殊に歴史が好きで、左傳國語戰國策諸子の類を濫讀し、之を編纂して東周書を作り、紀傳志表の體に組直したと云ふ。然し父は其濫讀の爲めに、正課以外の讀書を禁するに至つたが、彼は其趣味を易ゆることを得なかつたと云つて居る。父の傾向も歴史に興味のあつたことが記され、章は父より聘せられた館師の云ふ事をきかず、隨意に讀書した事から考へると、恐らく其小供に對し餘りに嚴格でなかつたのであらう歟。

章の風貌と性質とは大要以上の記述によりて髣髴するを得やう。然らば彼を取巻く周圍の狀況は如何であつたか。章の一族は佛山道墟の章氏を中心に結ばれた宗族的な家族を構成して居る。道墟とは會稽紹興府城の北凡そ二舍の所にあり、海潮が非常に高まると、其田地は水の爲めに埋没する事あり、それを防ぐ爲めに海塘を築く必要があるが、それには道墟の宗族全部が分に應じて資本と勞力とを出さねばならぬ。道墟の章氏は南宋の光宗寧宗の頃からこゝに定着し、章學誠の頃に至る迄既に五百年を経過して居る。此間は系圖によつて明かに知り得るが、それ以前は福建南部の浦城に居たとの傳説を持つて居る。其頃「全城百代歌」なる者傳はり、それによつて章

族は廣く福建江西江南諸地域に蔓衍し、且其歌によつて互に始祖太傅公から流れ出た一族であることを認め得たと云ふ。然し之は要するに文書によつて確實に究め得難い所傳に過ぎず、系圖に於ては明かに章の屬する家族の宗家は道墟に繋がれて居る。道墟の族は三つに分かれ、章學誠の屬する前屯の章氏は、この三宗の中で、季の弟から分かれたものと云ふ。たゞ彼の家は多分父の頃に道墟より紹興府城に徙つたと思はるゝが、然し其生活は仍然として道墟の宗族と密接な關係に繋がれて居た。故に彼の環境を考ふる場合は單に家庭にのみ止まることが出来ぬと考へらるゝ。

道墟の章族は、章學誠の生存時既に萬家あつたと云ふ。姚譜は萬家を「萬餘人」と記して居るが恐らく誤であらう。それは人員を數へる時には「數萬人」と書いて居るによつても分かる。この群は凡そ十里四方の地域に生息し、地方の巨族として認められて居るが、土地の廣さに比して人員が多い爲め、専ら穀物の栽培のみでは之を養ひ難きにより、沙洲には木綿を作り、山泉を以て酒を醸し、それらの生産高の多いことも亦地方に冠たる者があつた。又道墟に土着するものゝ外に、或は官吏若しくは幕職となつて四方に居る者、或は商買となつて道路に奔走する者、共に道墟の章族として互に助け合ふ關係になつて居た。固より族人結合の中心目標は宗祠にある。宗祠とは全族が作つた廟であるが、それは禮經にあるやうな昭穆を明かにして世數を計る爲めでもなく、排廟と毀廟とを設けて屬盡くるの義を顯はす如き封建的な意味もなく、全く單に「某姓家廟」と稱するに過ぎぬ。且かゝる習慣は何の代に起つたか分からぬ。恐らく宋元以後であらう。而も大宗小宗族長房長によつて秩序立てられ、宗祠の祭祀は族が交代して之を營んで居る。かゝる宗族社會は決して學者や思想家の案出した者ではなく、全く自然に發生した者である。宋の大儒司馬光や朱熹が經典によつて家廟組織を案出したが、それらは實行

されなかつた。そして宗族組織は自然に生れ、其構成分子たる各家族は家に神堂を設けて、古い家廟制の遺意を傳へて居る。而して廣い範圍の血族が、親疏に關係なく團體を組織し、自然に統制を作り、秩序を定めて居るのは、天に屬する仁道の發露と云ふべきであらう。之は章學誠が宗族に對して全面的に肯定した理論である。顧炎武が曾つて廬墓の制を古に非ずと知り乍ら猶習慣に隨つたと云ふあの惱みは、章學誠にありては反對に自然發生の宗族主義はむしろ尊重すべしとされて居る。章を以て顧と比較して論評する學者の中には往々顧の「是古」に對し章の「是今」を擧げて對照せしめる。これは常識的な言顯し方に過ぎず、必しも深く辯ずる要はあるまい。猶種々の點に於て章學の影響を受けたと考へらるゝ章炳麟は、かゝる宗族制の起源を、蠻漢の區別を明瞭にして以て漢族の血の純潔を保たんとする要求から出たと説明を加へて居るが、之は章學誠に取つては思ひ掛けない解釋であらう。

既に宗族制に重い意味をつけ加へた章學誠は、更に此制度を擴充せんと欲した。章氏の一族で北京に居る者中心となり、章族の公會を作つた事は、明代に始まつて居る。其頃京師に居た章族は物力豐饒で、春秋の歲祀には、宗廟に捧ぐる牲も幣も共に隆盛であつた。祭畢つて酒宴に移る。其折は長幼尊卑悉く歡を盡し、皆一日の樂を享けて散じた。其事は今に至るも長老の語り草となつて居ると章は書いて居る。其公會を新たに復活しようとして云ふのは彼の意志である。此公會は宗祠と意味を殊にすと彼は云ふ。蓋し土着に非ず、四方に僑寓する者、相集つて交友の情を溫めるのは公會の目的である。故に宗祠は天屬の仁に根據をもつに反し、公會は人合の義に依つて發すると云ふ。理論の如何は別として、章が章族の結合と云ふことに就て、充分な價值を認めて居たことが明白である。

既に宗族を重んずる章に取つては、其生活は半宗族の中に存したであらう。随つて章族の歴史は彼の思想に大きな影響を持つたと考へて然るべきであらう。「家效川八十序」に云ふ

吾章族大支繁、人才輩出、其以忠孝節義著者、簡策詳之、功名事業顯者、金石著之、上昭史乘、下光譜牒、約略可省識也、

と。今之を一々明史又は家乘と照合することをやむるが、要は章族に傳はる歴史的人物の傳統が族人を支配して居た事明かである。且章學誠の屬する前宅の章族は、其始祖以來優れた人材が出たとも云つて居る。章族の繁榮せるは、恐らく明代であらう。明末に章格庵が出て、章族の後勁と稱せられて居る。清になつてから章族中特に目立つて出世したものが出なかつたらしい。然し道墟の章族には猶詩文を以て互に應酬すると云ふ風雅な流が絶えなかつた。然るに章學誠の家傳によつて察するに、彼の生存時に於ける章族は専ら勤苦力行の生活を以て族を維持するに努め、若しくは官途にあるも幕職にあるも一樣に其職に清麗懽能な人の如く描寫せられて居る。これ恐らく雍正朝に執られた嚴格なる政治方針が望族の豊かな生活を許さなくなつた結果ではあるまい歟。彼の父が應城の知縣として其任に死し、家に餘財なき爲め郷里に歸ることが出来なかつた。然らば章學誠は章族の困難な時に生れたと考へて差支ない。會々彼は乾隆の盛時に於て進士に及第したのであるから、當に世に出て、家運を挽回すべき好機であると考へらるゝが、彼は自己の性質官途に適せずとなし、東西に浪走し、又敢て時の風潮に随つて學風の流行に伴ふこともせず、一途に其性質に適した道を撰んだ。蓋し彼は其性聰明に非ず。所謂秀才型とは異なる。却つて狷介にして其志に隨ひ、且族に傳はる誇を持続けつゝ終世好む所を追求した人であらう。

康熙の頃、道墟の章族は猶詩文を以て應酬する風雅の餘韻を存して居たやうであるが、その一族中の章泰占の

詩論は興味をひく。彼は浙西・浙東の詩風を論じて、浙西の詩は情寡なくして理繁、浙東の詩は情、理に勝ると云ふ。所謂情とは道德的感情を指すが如く、聰明な浙西人の詩が才智に長するに反し、鈍重な浙東人は道德的感情を重んじたのであらう。是は詩文に顯はるゝ浙西・浙東の相異であるが、章學誠に至り學問の上に於ても浙東を浙西に對せしめた。彼によれば清朝一代の學問の源を開いた者として顧炎武を推すこと世の定論となつて居る。然れども是は浙西の學の立場に於て考へた説に過ぎぬ。浙東には黃宗羲から流れ出て居る一派の學統のあることを世人は知らない。此學統は遠く朱子に遡り、王陽明、劉宗周を経て黃宗羲に至り、下は萬斯大、萬斯同より全祖望に至るまで絶ゆることなく傳はつて來た。其傳統の長く遠いことは浙西學の比ではないと。章炳麟はこれに基き清朝一代の學問の系統を作り上ぐるに至つたが、其説はよく章學誠の缺點を去つて居る。乃清朝の浙西學の系統は乾隆の頃から始まる。南部安徽より起つた江永、戴震の流と、南部江蘇から起つた惠棟の流とが相合して考據學をなした。別に明末の際から浙東學の基礎が立ち、其特徴は禮經を説き歴史を重んじ、章學誠に至りて其説を擴張した。後清末に黃以周出で、經を究めて遂に南部安徽の學と交流するに至つたと云ふ。其章學誠を以て浙東學を擴充した者と認めたのは、誠に章炳麟は學誠の知己と稱すべきであらう。尤も章炳麟は深く學誠の影響を受け乍ら、其到達した所は全く異なるものがある。彼は虛無主義者として知らるゝ。然し政治や社會のあらゆる制度を否定しつつも、猶家族を以て決して分かつ可からざる單位とする。この點浙東學の句が強いやうな感じがする。而して彼の弟子支偉成の「清代樸學大師列傳」によれば、黃宗羲より章學誠に流るゝ學派を史學派と稱して、浙西の經學派と對立せしめた。支偉成は其師の指示によつて書いたと云ふから、章炳麟は浙東學の特徴を史學に於て見出したのであらう。然らば浙東派が史學派だと云ふ印を押されたのは、章炳麟に始まると見て差

支あるまふ。

章學誠は既に浙東諸先輩の學を繼承し、之に由つて其史學を大成せしめた。然し章の標榜する所は文史である。それ故に胡適は彼の學を文史學と稱して居る。文史學は必ず史學と區別して考ふべき者であらうか。勿論後にも述ぶるが如く、彼は文章を重んずる。且其文章は邵廷采に影響せらるゝ所最多い。姚名達は章の學を究めんが爲めに、併せて邵廷采の年譜を作つたのは、正しい理解の仕方であると思ふ。廷采は、章の心友邵晋涵の従父で、蕭山の巨族として推され、道墟の章氏とも世交がある。章は彼の文章を表して五百年來見ることに罕なりと云つて居る。然るに章が親しく古文の義法を授つたと云ふ朱筠は、廷采の碑文を書いて、廷采歿してより紹興の師法と史學絶ゆと云ふのみで其文章に就ては何も云つて居ない。然らば其義法を傳授された章學誠は却つて廷采の文章を賞揚して止まぬのは頗る解し難い。蓋し學誠は、文章の方法即技巧を朱筠より得たであらうが、其精神に至つては、邵廷采に深く影響されたのであらう。廷采によれば、文章にして世道に關せざるものは作らざるも可、若し世道に關する者ならば作らざる可からず。文采未だ極めざるも作るを妨げずと云ふ。其作る所は、師友父祖の淵源であり、特に浙東陽明學の純粹なる系統を樹立するに最も力を注いである。是に於て所謂浙東の師法は、之を受けつぐ弟子の行動と併せて史學に於て顯揚せられ、之を表現する爲めに其實質に即し、必しも文飾を加へざる筆致を以てす。茲に學と文と史との一致が把握せらるべきである。章學誠の「文史通義」の文史と云ふは、此意味に於て理解されねばならぬ。

以上の叙述により、章の爲人、環境、生活、郷里先輩の影響等を大體に於て知り得るであらう。進んで彼の學に就て語らんと思ふ。

二 共 學

章學誠は少年時から歴史が好きであつた。又自ら史學に於て天授ありと自信をもつて居る。然し彼を不朽ならしめた者は固より「文史通議」である。此書物は、これを精密に其各篇の著作を年代順に考察することはむづかしいと云ふ。たゞ既に文史を以て名とするから、彼が文に對する考へ方を一應究める必要がある。彼は少年時父の下にあつて、嚴格に四書を學ぶことを命ぜられた。其際恐らく仕官を以て身をたてさせる爲めに、制義の文を作らしめられたのではないかと思ふ。これには直接の史料は一寸見當らぬが、たとへば「答沈楓堦論學」には、明の時代制義が盛んに行はれた。清朝になつて明史の編纂が企てられた時、特に詞科を擧げて學問文章の上をとつたが、それが一應片付き、雍正初年から乾隆十年位までは、學士は四書の文義を矜つた。恰も彼は十五六の時、老生宿儒は四書の文義を尊んで、通經脈古の學を雜學と排し、詩古文辭は之を雜作と稱し、四書の文に巧な者を以て通として居たと。これ彼の經驗による所であるから、彼は老儒から嚴格に制義の文を課せられたであらうと想像せらるゝ。其後朱筠から古文辭の法を授つた。彼は朱筠を歐陽修以來の文章家と推賞して居るから、恐らく文章の技巧に於て、相當の感化を蒙つたことであらう。然したしか段玉裁が邵晋涵に與へた手紙の中であつたと思ふが、段は章の言説には同意を表したが、章の文章には制義の臭味があると評したと云ふ。この批評は當時の學者の間に遍ねく行はれたと見え、章は之に對して熱心に辯明を試みて居る。之を虚心に讀めば、章の辯明は強辯に過ぎないと考へらるゝが、然し章の文章に制義の匂があるとして非難することも必ずしも當らない。勿論章自身は古文辭を以て自ら命じて居る。その古文辭の中に制義の匂がすると云ふことが、文章の技術からしての非難

に過ぎず、たとへそんな缺點があつても、それは自ら文學的見地、章の言を藉りて言へば辭章學者の見方である。尤も段玉裁のやうな考訂學者(章の言)の見解は又自ら別に存するものもあるかも知れぬ。蓋し段玉裁は巨大なる考訂家であると同時に、その文章も知的に凝集された簡潔な名文であると思ふ。さう云ふ人の眼からは、多分に制義的な色彩を帶んだ章の文章に慊らなかつたと考へらるゝ。然し技巧上の非難は當然受くべしとしても、それが爲めに彼の文章の特徴を見逃がしてはならぬ。章は自ら能文に非ずと云つて居る。又邵晋涵は彼の文章が率易で、この率易の點を自然だと見做して居ると云つて居る。章はこの批評に對し自ら反省した結果邵晋涵には誤解せる點があると言つて居るが、胡適も認むる如く彼の文章は矢張率易を特徴として居ると定めて宜しいであらう。彼は前にも述べた如く、邵廷采から種々の影響を受けて居るが、殊に文章の上に於て強い影響を受けて居た。彼の子供の貽選の語る所によれば、全祖望はかつて邵廷采の文章を罵つたことがあるが、章學誠は却つて全氏の文を以て修辭飾句、蕪累甚しと貶し、廷采の文は辭潔にして氣清と許した。又全氏は泛濫驅驟であるに對し、廷采は雄健謹嚴であるとも云ふ。この廷采は殊に陽明の學說を表章し、又明朝の遺聞軼事を修めて一家の言をなして居る。それは學と行とを密接に關聯せしめて、その間に於て自然世運の變遷をも知らしめると云ふ構成であつて、非常によく出来て居ると思ふ。或は全祖望の「宋元學案」よりも優れた歴史であるかも知れぬ。章學誠の「湖北通志稿」にある「復狄名士傳」「明季寇難傳」の類は、如何にも廷采のそれと似た點がある。たゞ廷采の文の雄健謹嚴なるに比較すると、章學誠のそれは、率易自然の點が多いであらう。そして彼自らは文を作る時の心構へとして眞と清とを擧げて居る。眞とは文そのものの工を求むるのでなくして文を作る宗旨を求め、清とは文の氣體を純粹ならしめ、夾雜物を入れぬことであると云ふ。必意事物の眞の意味を把握し而してそれに即應す

るやうに文を整へると云ふことである。其心構へによつて文を作る際は特に敬を主として氣をして攝收しなければならぬと云ふ。これを文徳と名づけ、「通義」の「文徳」篇に於て、これは先人の云はなかつた所だと云ふ。蓋し眞と清とを期する彼にありては、特に文を作る際に敬を主とすべきことを體驗したのであらう。その結果事を叙する際、次第に事があつて筆が自然にその事に隨ふやうになつたと自信を以て語つて居る。かやうに彼の自ら言ふ所から歸納すると、彼は辭章家の文を文の標準として居るのではなく、彼の學問を最もよく顯はす文を求めたに過ぎぬ。そこで一步進んで學と文との關係に就ての彼の考へ方を究めて見たいと思ふ。

學とは何んであるか。彼は一代の風尚を作つた學問を三つに分解して居る。即考訂、辭章、義理である。この三つの學問の分野は、これを簡人に就て考ふれば、それ／＼才、學、識に當る。此才、學、識は、幼年時代に於て具有する記性、作性、悟性に基いて居る。記性は學にあたり、之を延せば考訂の學となる。作性は才に當り、之を延せば辭章の學となる。悟性は識に當り、之を延せば義理の學となる。故に人は幼童に於て既に學に與かるべき資質を具へて居るのである。然し乍らかゝる知的分析をへて組立てられた學問は、章學誠をして言はしむれば、實は學問に非ずして功力に過ぎぬ。この點を明かにして居るのは「通義」の「博約」篇であらう。其要旨は、博く學ぶと云ふことは、禮記の云ふ如き王者の質問に答へる爲めでは決してない。博學の點に於て最も優れたのは宋の王應麟であらう。彼は經傳子史、名物制數に於てよく綜合的な研究をなして居る。然しそれは飽迄も知識を求むる努力であつて、學其者ではない。畢竟智識の追求のみを以てしては眞の學問が得られない。然らば學とは何んであるか。學には天性がある。我々は讀書脈古の中に於て、最初に理解せられ、而もそれは終身變らないものがある。又 には至情がある。我々は讀書脈古の中、欣然心に會し、自然に歌ひ或は泣くものがある。この

性と情とが學問を決定する根本であるが、而も常に功力を以て之を充實して行かねばならぬと。こゝには性情と併せて功力が説かれて居るが、然し此功力は性情と對立する關係に於て解すべきではなく、むしろ功力を致す、即博く學ぶ間に於て止むを得ざる要求が動き、それは自ら事物に含まるゝ道、即「所以然」を體認せしめるのである。故に學を爲すの方法は、博覽を以て趨向の入る所を驗し、習試を以て心の安んずる所求を、旁通を以て其包括すべき範圍を究むべきであると云ふ。かくの如くにして初めて人生に功がある。蓋し人生と自己の身心とは一にして二ではない。未だ之を心に會得せずして人生の爲めとなるものはないと云ふ。それ故に章學誠の云ふ學とは、必ず心に生き、行を生かし、併せて人生を生かすものであつて、云はゞ支那の傳統的精神を發揮せんと欲するものであると思ふ。

章はかゝる立場からして、知識を以て組立てらる考訂、辭章、義理の學は、結局學と文との二つに要約せらるゝと云つて居る。即學は博覽と閱歷即體驗によつて深められる。言ひ換れば事物の然る所以、即理を知る。文はこれを發明して世用を期する。言ひ換れば當に然るを爲す。或は學とは體驗を以てする研究であり、文は之を外に著す實行であるとも云ふべきであらう。「通義」の「質性」篇に於ては支那の二大文學者莊周と屈原とを標出し、其不朽の名著は結局至純の性情に根ざす學の修養によることを認めて居る。章廷楓は之を以て文性を論じたものとし、従前文情と文心とを論じて未だ文性に及ぶものがなかつたとして此篇を高く評價して居る。而して章は屈原や莊周の決して中行の人ではなく、孔子や孟子の所謂狂狷者流である。この狂狷者流こそ却つて中行の君子を認知する基となるのであつて、中行と云ふ概念にとらはれて行動するものは孔孟の所謂郷愿に過ぎないと云ふ。然らば中行の君子は何によつて認めるか。これは當然六藝の文によつて直接認むると云ふことにならうが、

併しそれに固執してはならぬ。事物は變化する。この變化に對し、六藝は何も規範を與へて居ない。併し六藝の精神は常に生きて居る。蓋し章の考へ方は事物の貌を究めるのでなく、その意味を搜り、之を生かして文を以て撰述せんとする。故に學と文とは分かつ可らざる關係をもつて居るのである。

章自ら史學に於て天授があると自信して居る。故に彼の力を注いだ點は實に史學の建設である。「通義」の「史德」又は「公言」篇と其他の文章を綜合して考へると、彼はさきに學問の三つの型として擧げた考訂、辭章、義理に對し、それ／＼學、才、識を配當したが、この學才識の三者は史學に於て缺く可からざる要素であること既に劉知幾が述べて居る所である。然し劉は史の形式を重視する。故にその才學識も、單に歴史の著述に當り、事實の撰擇をなすに必要な條件であると云ふに過ぎぬ。章は形式より史の意味を重んずる。それには心術を正すことが最重要である。心術を正すとは、彼の言葉に隨へば天と人との際を慎重に辨別することである。即ち天を盡して益すに人を以てせざることである。歴史は事をのせる。事は必ず文によつて表現せらるゝ。然るに人事は複雑であり、至純なる性情を以て思辨するに非ざれば、其眞實を得難い。且理義の正しきに就かざれば、發して文を爲すことは出来ぬ。史の標準は固より孔子の春秋にある。春秋は義を立てた。これを事によつて隱微な情をも表現したのは左傳である。春秋は左傳と相まつて茲に史學の標準が定まつた。其意をとりて之を生かさねばならぬ。これ實に天を盡して増すに人を以てせない嚴格なる史學である。そしてそれ故に歴史の文章は天下の公言となるのであつて決して一人の私言ではない。言ひ換れば主觀でなくして客觀である。例を以て言ふと、顧炎武がかつて詩文が時代によつて變化することを認識し、これを説明して、一代の文、沿襲已に久しく、人々此言葉を用ゐ、此説を云ふを許さざるやうになつたから、そこに變化が生ずるのだと説明して居る。然しこれは單なる主

觀的解釋に過ぎない。それよりも言語文字は自然に變化する。これは天であつて。決して人意によるのではない。これ章の事物を考へる方法であつて、蓋し一代の文學は、必ず文學その者を直接に理解すべきであつて、それは即自然の理法を顯現して居るわけである。

大體章の考へ方の要旨は以上で分かると思ふ。然るに彼の生存時代に於ては、戴震を代表とする考據學の全盛期であつて、一方之に對し袁枚の辭章學も亦一時に流行して居る。章の見る所では、袁枚は當時讀書社會を風靡して居た考據學に對し自らの文學的立場を樹立せんが爲めに、彼の標榜する古文を以て形而上の道となし、考據を以て形而下の器となした。それは考據學とは畢竟火のやうなものであつて、物について初めて表はれる。然るに古文は水の如くであつて、性靈の泉より湧き出し、混々として江海に流入する。この立場からして六經の文までも批判し、その中に含まるゝ禮の書物即三禮の如き、又は尙書の中にある堯典、洪範などの如き全く無價値であつて棄て去つてもよく、又詩經に於ても多分に儀式的な雅頌をとり去り國風丈を存すべしと云ふに至るまじい言説を恣にして居る。かゝる考へ方は實に人心を惑はす風狂人の囁語に過ぎぬ。元來考據と古文とを對立せしめて學問の分野を爭ふと云ふことがこれ既に間違ひであつて、學に本いて文があり、而も學と文とは共に道を明かにする器に過ぎぬ。蓋し道は學や文によつて自然に顯はるゝものであつて、器を離れて道を云ふことは絶対に不可能である。この道の一端を顯はす學と文とは、天に屬する至純な性情によつてのみ可能である。それ故に人心を惑はし、風教を害する如き浮薄にして實質なき文學は、それは決して文學でないと言ふ。かやうに袁枚の説に痛罵を浴せて居るが、考據學の中心人物たる戴震に對しては相當高い評價をなして居る。彼は名物度數に關する研究に於て最精微を極め、其方法を伸して原性、原善の諸篇を作り、所謂義理學の方面に於ても先人未發の境

地を開拓して居る。これ其志道を明かにせんと欲するにある。然るに戴學の徒はこの眞意を解せず、考據を以て尤も價值ありと認めて居ることである。戴震はかつて宋儒の實踐躬行を嘲笑した。これは宋儒の云ふ實踐躬行とは、釋老に近いのを惡んだもので、決して非難すべきではないが、其言語學的な方法からして古代を究め、そこに道を求めようとする事が間違つて居る。言語は變化する。其變化によつて時と世界の變易が分かる。それだと云つて古人の使用した文字のみが道を顯はすと考へるのは、これ道を知らざる者であると。畢竟戴は道を古に求めるに對し、章は道は器について古今を貫流して發現すると考へたのである。

かやうに章の根本的な考へ方は、恐らく戴震の説によつて、更に發展するに到つたのでないかと思ふ。そして章自身の史學の立場を次第に明晰に闡明するに至つた。これ即章の史學である。

「通義」に四教篇があり、易教書教詩教禮教を云ふ。其中で書教は最代表的な著述で、當時の讀書社會に非常に注目せられたと云はるゝ。此篇に於て彼の公式として提出した所は「三代以上記注有成法、而撰述無定名」と云ふ事である。記注に成法ありとは、周官聯事の義により、三代特に周代に於ては、當時の記錄が種々の官統に於て各詳密に存じ、且これ等は慎重に保存せられて居たと考ふ。所謂「法具於官、而官守其書」と云ふのがそれである。此記注は其性質上、過去の記錄であつて、事實を忘れざるが爲めに誌する者である。而して三代の中記注の法の最完備した時代に於ては、撰述の官がなかつた。それ故に帝王の行爲は、其外的な事情と、其言語と共に記注せらる。かゝる事行は千變萬化、固より一定の法がない。史官は其事行を最適當に表現せねばならぬ。且其事行を書き顯はす一篇の文は、其内容を以て直ちに其篇に名づけらるゝ。そこには一定の例がない。尙書の各篇目と其文章とは、かゝる性質のものであり、之を圓神と云ふ言葉で顯はして居る。そして歴史の本質はこの圓

神の意味を知ることによつて把握せらるゝ。之は章學誠の理論の中で最重要な點であると私は思ふ。

然るに孔子の春秋を作るに及んで、例を立て、義を制した。茲に始めて歴史の形式が顯はれる。之より後歴史の形式は次第に整ひ、遂に史記、漢書となりて顯はるゝに至つた。尙書は孔子の撰定を経たこと確かである。そこに尙書は單なる往事の記録ではなく、後人を興起せしむべき意味を含む。即書教である。而も孔子の生存時は既に言と行とが分離した時代であつたから、彼は遂に例を立て、義を制する春秋を作らざるを得なかつた。そして左氏は之に詳悉なる事實を以て傳を作り、經と傳と相俟つて孔子の撰述の意味を把握し得る。司馬遷は形式を整備して之を紀傳體に組み立てた。而も其篇に命ずる上に於ても、亦其叙述の上に於ても、尙書圓神の意味を失つて居ない。漢書に至ると漸く形式に過ぎ、方智と云ふ記録の性質を濃厚に著すに至つた。凡そ撰述は單なる記録でない。必ず尙書圓神の意味を持たなければならぬ。然らざれば成例に拘束せらるゝ記録に墮するであらう。章學誠はこの書教篇の意味を押し廣げて、遂に之を六經に及し、六經は皆史なりと云ふ有名な公式を提出するに至つた。即六經とはすべて三代聖王が世道を経倫した跡を示す記録である。之を經と稱するは、戰國時代諸子が各その學派の主張を以て相爭ふにより、孔子の學徒たる儒家が其派の傳ふる典籍を尊んで經と稱し、以て他派より自を守らんと試みたによる。而もこれより六經は専ら載道の書と説かれ、其本質が忘却せられて、空虚なる道と云ふ方面のみから理解せられんとするに至つた。かくして、事と言とが完全に合一して一篇の文として顯はれ、それ故に萬世に亘りて人が其意味を發揮し得る本質が見失はれて仕舞つた。そこで章は六經を史と定め、それから後世のあらゆる著述が形を具へて出て來たと考へ、此見地によつて總ての著述に系統を與へんと試みた。これ漢の劉向によつて既に企てられたものであり、章は其意を押し進めて「校讐通義」を作つた。此編は四教篇

と相並んで章學の精粹を示す者と認めらるゝ。

章學誠は上述のやうな考へ方の上に立ちて、更に一種の歴史哲學を發展せしめた。且それによつて互に相爭ふ諸學派の外に立ち、これ等の學派を統一しようと企てた。それは「原道」「原學」の諸篇である。彼は先づ三代及それ以前を言と事との未だ分かれざる時代、言ひ換ゆれば、聖人の統治によつて行爲の中に道徳が含まれ、それが發して文章となつた時代だと云ふ。尤も上古は無爲にして治めた時代であり、それより開物成務、立制垂法の時代と變化して居る。立制垂法の時代に至りて文明が完備した。其最も整備したのは周の時代であつて、周公旦が著しき代表者である。かく自然の變化を辿りて道法完備の時代を顯出したのであるが、之は聖人の創造に歸すべき者であらう乎。さうではない。此説明の爲めに彼は三人居室説を用ゐて居る。即父子三人が居する生活に於て初めて共同生活が顯はれ、均平秩序の義が出る。進んで社會生活の複雑化と共に長幼尊卑の別形はれ、更に進んで政治の主裁たる君、文教を司る師出で、制度が次第に完備すると云つて居る。或はこの説明を重視して章には社會進化の思想があつたと論ずる者もあるが、これは誤りであらう。彼は單に文献によりて直ちに認め得るゝ現象の説明として比喩的に用ゐた説明に過ぎぬであらう。寧ろ彼は直接な思辨を以て、道は爲す所なくして自然であり、聖人は此自然の事物に就て必ず然る所以の理を見ると考へた。所謂窮すれば變じ、變ずれば通じ、通ずれば久しである。たゞ此場合聖人は決して道その者ではない。却つて道は無智の百姓に顯はれて居る。聖人はそれによつて道を見るのである。それ故に堯舜から三代に及び、聖人相次で起り、時の事物に就て絶えず理を求め、遂に周公に至つて道法完備の郁々たる文化を造り上げたのである。然るに三代の盛時は過ぎた。事と言との合一の時が終つた。如何に優秀な人物があつても、その然る所以の理を行ふことが出来ぬ。そこで孔子は六藝

を表章した。これ周公の集大成した道法を無窮に傳へ、以て教を後世に垂れたのである。之より空言教を説く師が生れ、教と政との分離が生じた。これ亦聖人の止むを得ざる所である。然るに孟子以後通儒と稱する者皆孔子の止むを得ざる所を願ひ、空しく道德を尊ぶ。これ誤りであつて、學ぶべきは孔子の周公を學んだ點にある。これ人間孔子の永久に生きる所以である。敢て古人を尊び、同時の人を蔑視すべきでない。此點は「原學」に於て更に詳細に論ぜられて居る。これ等の論述に於て、彼は餘りにも傳説に捕はれて事物を把握して居る點は、今日到底之を容認するを得ない。然し史學の構成の上に種々なる暗示を與へて居る點は之を充分に認め得る。

以上學誠は支那の學問に系統を與へ、更に進んで互に相爭ふ思想界を、その分域に限定して、別に彼一流の立場より之を綜合せんと試みた。こゝに彼の哲學が存するが、之はその源を王陽明に受けて居ることは彼自身も認めて居る。陽明には歴史を否定するやうな口吻が傳習錄にあつたと思ふ。併し事實その學徒から史學が顯はれた。恐らく陽明學の實行性が、學問の上で史學となつたのであらう。そして結果この浙東の史學を陽明の哲學によつて基礎づけるに至つたのは章學誠である。然しそれと共に實行の哲學は、史學の哲學として實行性を轉化せしめた。これ又止むを得ざる自然の變化であらう。